



Title	中津市定留鬼塚遺跡の皮袋形提瓶からみた須恵器の生産と流通
Author(s)	越智, 淳平
Citation	待兼山考古学論集. 2025, 4, p. 611-622
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/105075
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

中津市定留鬼塚遺跡の皮袋形提瓶からみた 須恵器の生産と流通

越 智 淳 平

はじめに

須恵器は、登窯による還元焰焼成によって焼成された灰色硬質の土器で、古墳時代から平安時代にかけて日本各地で製作された。これまでに、生産地や器種の変化、地方窯の展開状況など、多方面にわたる研究成果が蓄積されている（田辺 1981、中村 1993 ほか）。そのうち、特殊な器種（特殊須恵器）は、器種による分布状況や出土古墳との関係、装飾付須恵器の変遷などの研究がある（柴垣 1984、岸本 1975、山田 1998 ほか）。

特殊須恵器の一種である皮袋形提瓶は、古墳時代後期に作られる皮袋を模したとされる須恵器である。中津市定留鬼塚遺跡の皮袋形提瓶は、これまで知られている形態と異なるものが出土しており、当初から注目されていた。本稿では、当該資料の特徴を通して、①九州島における皮袋形提瓶の分類と分布、②須恵器製作における認知、③中津市定留地区を中心とした生産地（窯跡）と消費地（集落・古墳）のあり方を検討することを目的とする。

1. 定留鬼塚遺跡出土皮袋形提瓶

（1）遺跡の概要（図 1）

定留鬼塚遺跡は、中津市大字定留字鬼塚に所在する古墳時代の墳墓を中心とした遺跡で、中津平野の南側と東側に広がる洪積台地の下毛原（台地）の北東端に位置している。遺跡の東側は、天貝川の河口部となっている。明治 33 年作成の地形図からは、本来和田地区の東側崖面が、海に面していたことがわかる（大分県教育庁埋蔵文化財センター編 2015）。

定留鬼塚遺跡では、古墳時代後期～終末期の古墳 21 基が確認されている⁽¹⁾。皮袋形提瓶が出土した 1 号墳は、周溝のある一辺 10 m 以上の方墳で、主体部は単室の横穴式石室である。石室は一辺 1.5 m のほぼ方形で、通常羨道とされる部分には、追葬とされる掘り込みが 2 回確認されている。墓道は長さ 11.5 m で崖まで続いているが、本来はもう少し南（海）側に緩やかに延びていたと想定されている。

(2) 定留鬼塚遺跡 1 号墳出土品と皮袋形提瓶 (図 1)

1 号墳の石室と墓道から須恵器 25 点と土師器 (蛸壺) 2 点が出土している。須恵器は、坏 H 蓋 4 点、坏 H 身 6 点、有蓋高坏蓋 2 点、壺蓋 2 点、蓋 1 点、高坏 (脚部) 1 点、甕 1 点、皮袋形提瓶 1 点、長頸壺 1 点、装飾付須恵器 (子持器台) 2 点⁽²⁾、甕 4 点である。

坏 H 蓋の口径は、10.8 cm～15.8 cm で、その傾向は 10.5 cm～11 cm が 1 点、13.5 cm 前後が 2 点、15 cm 以上 1 点である。また、坏 H 身の受部径は、10.4 cm～14.7 cm で、その傾向は 10 cm～11 cm 前後が 3 点、13 cm 前後が 2 点、15 cm 前後 1 点である。長氏の豊前地域の編年 (長 2012) でいえば、Ⅲ-3 期 (6 世紀末～7 世紀第 1 四半期頃) までに初葬が行われ、Ⅳ期 (7 世紀第 2 四半期頃～第 3 四半期頃) までに追葬が行われたと考えられる⁽³⁾。なお、注目すべき器種として、皮袋形提瓶以外にも、坏 H 大型品、子持器台と突帯付口縁の甕があり、3 中津市定留地区における須恵器生産と消費のあり方、でその位置づけを行う。

皮袋形提瓶は、定留鬼塚遺跡 1 号墳の玄室から延びる墓道が 2 m 南に延びた後に、5 cm の段差をつけて作られた下端の最大幅約 1 m のテラス状の平坦面の玄室に近い場所から出土した。同じ平坦面からは、坏 H 蓋と身、坏 H 大型品 (図 1-1・7・10) の 3 点が出土している。

皮袋形提瓶は、胴部左側が一部欠損している。ただし、比較的新しい破断面で、欠損部が古墳に副葬される際のものかは不明である。製作の特徴として坏 H を底部から内面が内側になるように折り曲げて胴部を作っていることが挙げられる。また、把手は 3 つ残存し、欠損部も含めて 4 つと想定される。提瓶の底部は坏 H のかえり部分をつまみながら接合して閉じているため、他の資料と比べて幅が広い。胴部 (坏) の外面は静止ヘラケズリ、内面は回転ヨコナデで調整されている。復元長 17.1 cm (残存長 12.1 cm)、高さ 9.1 cm、幅 6.4 cm である。

2. 九州の皮袋形提瓶について

皮袋形提瓶は、通常無蓋高坏の坏部を折り曲げて胴部を作り、坏底部にあたる部分を肩部として別作りの口頸部を接合して成形する。胴部には、粘土帯の貼り付けや沈線、列点文などで皮の縫い目などを表現した文様が施される。田辺昭三氏は、皮袋形提瓶は、特殊須恵器の 1 つで、東海以西の西日本全域に及ぶ最も広い分布範囲を持ち、出土数も多いとする (田辺 1981)⁽⁴⁾。

九州地方の皮袋形提瓶を集成・分類した宮田浩之氏は、34 遺跡 (出土地) 37 例をあげ、①大型品と小形品、②形態及び表面の皮の縫い目や合わせ目表現から、4 段階⁽⁵⁾に分類をしている。その変遷は、①大型品から小型化、②縫い目等の表現は、竹管文→無文化の傾向、③2～3 段階がピークと指摘する (宮田 1999)。また、陳永強氏は、全国 82 地点 87 点 (出土地未確定 15 点除く) の集成を行った。九州では 38 地点 42 点の出土があり、窯跡資料があること、福岡県の出土が圧倒的に多いこと、古墳を中心に出土することを特徴と指摘する (陳 2024)。

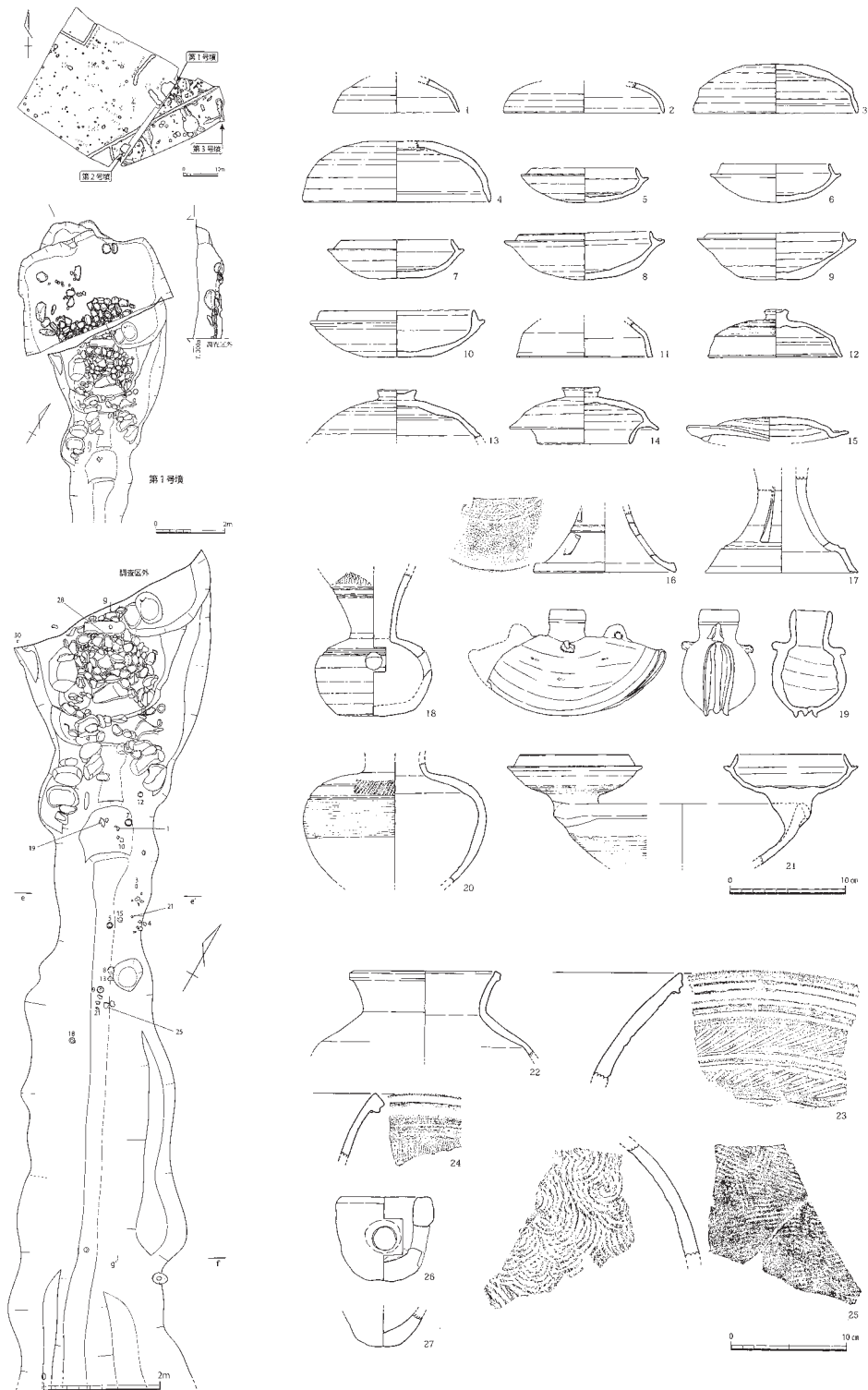


図1 定留鬼塚遺跡1号墳遺構平面図（左上 S=1/1000、左中 S=1/200、左下 S=1/120）・出土遺物（S=1/6）

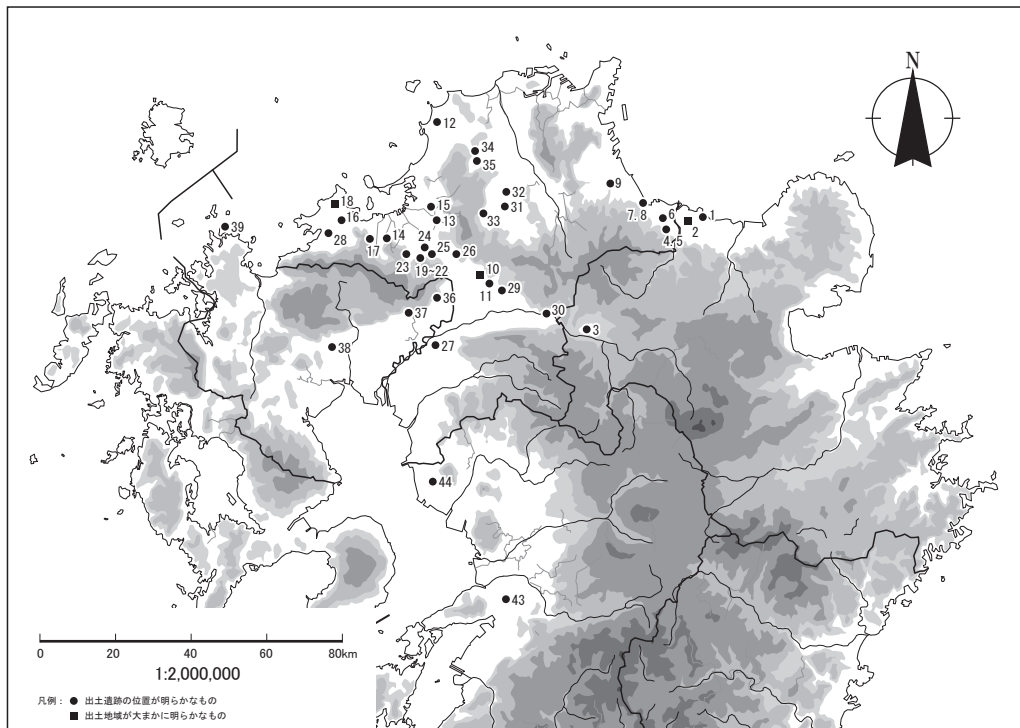


図2 九州の皮袋形提瓶出土遺跡の位置（図中の番号は表1に対応）

今回、上記の集成・分類をふまえ、九州島の事例は、表1・図2の38遺跡・地点、42点（出土地未確定2点）⁽⁶⁾とし、分類指標を整理したものが表2・3である。分類は、胴部の元となる器形でⅠ類：無蓋高坏の坏部（箱形の坏）とⅡ類：坏Hの坏身、で大分類をした。次にⅠ類は、胴部の正面形から、A：台形、B：半円形、C：釣鐘形、D：三角形や扇形、に小分類をした。文様のうち、縫い目表現や区画を、1：山形で中心に縦の直線、2：×印、3：縫い目表現が省略や不規則な形、4：横方向の沈線で区画、5：なし、に細分して、細目1とした。また、表面の文様（表現方法）を、ア：列点文（竹管文）、イ：刻目文、ウ：カキ目調整、エ：なし、で細目2⁽⁷⁾とした。

分類に沿って、その特徴を確認すると、最も精緻に製作されている資料は、大野原遺跡皮袋形提瓶（以下、遺跡名＋資料と記載）と奴山33号墳資料で、Ⅰ－A－1類にあたる。奴山33号墳資料は、縫い目表現の間も刻目文でうめられ、半環状把手があるなど装飾性が高い。両者の胴部の差異は、時期差とするか系統差とするかは資料数が少ないため、現時点で判断が難しい。牛頭塚原15号墳資料や観音山8号墳資料、松葉1号墳資料は、縫い目表現の山形部分が大野原遺跡資料よりも直線化や外形に沿うなど簡略化・模式化されている。縫い目表現が×印になる2類は、Ⅰ－A－2類の塚原古墳群丸山32号墳資料や胴部正面が半円形を呈するⅠ－B－2類の石川1号墳資料がある。丸山32号墳資料と縫い目表現が類似した資料に、三重県

表1 九州島における皮袋形提瓶出土一覧表

番号	所在地		遺跡・出土地	遺構			型式	底部長	文献
	県	市町村		古墳	全長	出土位置			
1	大分県	中津市	定留鬼塚遺跡 A区1号墳	方	10+	墓道	II	17.1	1
2	大分県	中津市	中津町			出土地不詳	I-D-5?	?	2
3	大分県	日田市	小迫遺跡第5地区 4号横穴墓	横穴	8.9	玄室	I-D-5	12	3
4	福岡県	上毛町	穴ヶ葉山南5号墳	円	13	墳丘北西裾	I-A-3	22.8	4
5	福岡県	上毛町	穴ヶ葉山南5号墳	円	13	墳丘北西裾	I-A-3	18.6	4
6	福岡県	上毛町	雄熊山遺跡（古墳）				I-D-5	20.7	11
7	福岡県	豊前市	黒部古墳群2号墳	長方	11.1× 14.6	東側墳丘下	I-A-5	16.5	6
8	福岡県	豊前市	黒部古墳群2号墳	長方	11.1× 14.6	東側墳丘下	I-A-3	14.7	6
9	福岡県	築上町	茶臼山東1号窯跡	-	-	窯跡の灰原	I-A-3	19.7	5
10	福岡県	筑前町	森山出土				不明	—	7
11	福岡県	筑前町	乃木松古墳群 1号墳	円	14.8	周溝	I-D-5	21.9	8
12	福岡県	福津市	奴山33号墳	円	13	墳丘中供献土器群	I-A-1	25	9
13	福岡県	宇美町	観音浦17号墳	円	14	墓道（追葬時にかきだし）	I-C-3・4	16.5	10
14	福岡県	福岡市	西区野芥（古墳）			出土地不詳	I-A-1	11.4	11
15	福岡県	福岡市	丸尾古墳2号墳	円	12	表面採集	I-C-4	11.6	12
16	福岡県	福岡市	元岡石ヶ原古墳	前方		墳丘表土	I-A-2	(24.3)	7
17	福岡県	福岡市	羽根戸16号墳			墳丘	I-A-5	17.9	7
18	福岡県	福岡市	西区小田	-	-	-	I-D-5	13.2	13
19	福岡県	那珂川市	観音山8号墳	円	12	石室	I-A-1	21.8	14
20	福岡県	那珂川市	観音山33号墳	楕円	19× 16.5	墳丘・墓道	I-C-4	13.8	15
21	福岡県	那珂川市	観音山33号墳	楕円	19× 16.5	墳丘・墓道	I-C-3	10.1	15
22	福岡県	那珂川市	観音山33号墳	楕円	19× 16.5	墳丘・墓道	I-C-4	17	15
23	福岡県	那珂川市	白石古墳群Ⅲ群 1号墳	円		表面採集	I-B-3?	8.8	7
24	福岡県	春日市	塚原古墳群5号墳	円	10	墓道	I-A-4	17.8	16
25	福岡県	大野城市	牛頸塚原15号墳	円	16	周溝	I-A-1	14.5	17
26	福岡県	太宰府市	吉ヶ浦3号墳 （高雄古墳3号墳）			不明	I-A-1?	13.5	7
27	福岡県	久留米市	（西島） 銚子塚古墳			不明	I-A-4	9.3	7
28	福岡県	糸島市	石川1号墳	方	12.4× 11	前庭部	I-B-2	12.9	18
29	福岡県	朝倉市	大岩西部1号墳			前庭	I-A-5	21.1	19
30	福岡県	うきは市	大野原遺跡				I-A-1	16.6	7
31	福岡県	飯塚市	見原2号墳			墳丘周辺	I-A-4?	9.3	7
32	福岡県	飯塚市	川島古墳			不明	I-A-1	14	9
33	福岡県	飯塚市	塚原17号墳	円	12	周溝	I-A-1	19.2	20
34	福岡県	宮若市	上大隈古墳				不明	—	7
35	福岡県	宮若市	宮ノ辻古墳			不明	不明	—	9
36	佐賀県	鳥栖市	都谷遺跡 ST017古墳	円	10～ 12.5	墳丘盛土	I	(6.5)	21
37	佐賀県	吉野ヶ里町	松葉1号墳	円	25	前庭部	I-A-1	24.8	22
38	佐賀県	小城市	鞍投窯跡			窯跡の灰原か	不明	—	23
39	佐賀県	鳥栖市	キツネ塚古墳				不明	—	7
40	佐賀県		出土地不詳	-	-	-	I-D-5		24
41	佐賀県		出土地不詳	-	-	-	I-D-5		24
42	長崎県	平戸市	出土地不詳	-	-	-	不明	—	11
43	熊本県	熊本市	塚原古墳群 （丸山32号墳）	円	18	周溝	I-A-2	23.5	25
44	熊本県	荒尾市	野原古墳群	-	-	-	I-A・D	—	26

表2 皮袋形提瓶の分類

大分類		小分類		細目1		細目2	
胴部の器形		胴部の正面形		縫い目表現・区画		表面の文様	
Ⅰ類	無蓋高坏の坏部	A	横長の台形で肩部は丸みを帯びる	1	个印（山形で中心に縦線）	ア	列点文（竹管文）
		B	上部は半円形に近く底部は直線	2	×印	イ	刻目文
		C	釣鐘形	3	縫い目表現1本など1・2より省略	ウ	カキ目調整
		D	三角形や扇形（肩部がAに比べて狭い）	4	横方向の沈線で区画	エ	なし
Ⅱ類	坏H身			5	なし		

表3 皮袋形提瓶の分類（胴部形状）と細目1の関係

	Ⅰ類				Ⅱ類
	A	B	C	D	
1	○				
2	○	○			
3	○		○		
4	○		○		
5	○			○	○

伊勢市風呂山古墳資料があり、×の中央交点以下にタテの粘土帯がある。これらのことから、細目1の2類は1類より後出すると考えた。また、A類は、底部ではなく胴部中央が最大長と

なるラグビーボール形を呈する穴ヶ葉山南5号墳資料などがあり、細目1では3～5の傾向が見られる。C類は、A類よりも正面の幅が狭くなり、底辺の長さとの比が1に近いまたは高さの方が底辺より長くなり、釣鐘形を呈する。観音山33号墳から出土したⅠ－C類3点の縫い目表現と側面形態を比較すると、細目3は扁球形、4は砲弾形である。側面形態から細目3が4より古いと考えられる。Ⅰ－D類は、縫い目表現などを含む文様がなく、小迫遺跡資料や乃木松1号墳資料が該当する。定留鬼塚遺跡資料は、Ⅱ類に該当し、他に類例が認められないことから、現時点でこれ以上の細分を行っていない。ただし、文様がない5類になることや小型で直立した口頸部などからは、Ⅰ－C類やⅠ－D類と同時期の資料と考えられる。

皮袋形提瓶が、複数出土した事例は、観音山33号墳・黒部2号墳・穴ヶ葉山南5号墳の3遺跡であるが、いずれも同じ分類に属する資料のため、共伴事例による変遷を決めることは難しい。そこで、形態や縫い目表現・文様で各分類の消長を表3のように整理し、共伴する須恵器蓋坏等の時期を参考に皮袋形提瓶の変遷を1～5段階にわけて示したものが図3である。1段階は、皮袋形提瓶の最古段階で、Ⅰ－A－1類が出現し、Ⅰ－A－2類も見られる。2段階は、縫い目表現が簡略化されたⅠ－A－1類やⅠ－B－2類が見られることに加え、Ⅰ－A－3類やⅠ－D類といった文様表現が簡略化されていく段階と考えられる。3段階は、Ⅰ－A類でラグビーボール形の個体が見られること、Ⅰ－C類が出現することが特徴である。4段階は、さらに文様の省略化が進む段階として細分した。5段階はⅠ－A類やⅠ－C類は継続して見ら

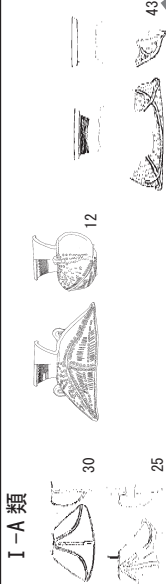
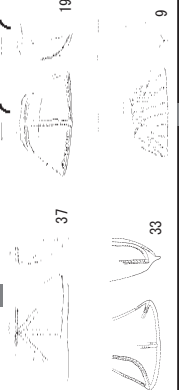
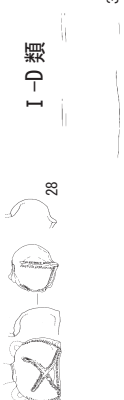
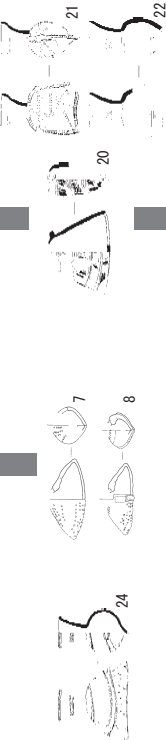
段階	I 類		II 類
1	I-A 類 		
2	I-B 類  I-D 類 		
3	I-C 類 		
4			
5			

図 3 九州島の皮袋形提瓶変遷図 (S=1/16、図中の番号は表 1 に対応)

れ、文様のないⅠ－Ⅲ類⁽⁸⁾やⅣ類も確認される。その結果、宮田氏や陳氏が指摘する内容と重複する部分もあるが、①正面が台形となる形（Ⅰ類）が基本であり古墳時代を通して製作されること、②底部は、丸みを帯びているものから直線的になること、③3段階頃に鈎鐘形（Ⅲ類）やラグビーボール形（Ⅳ類）の胴部が出現すること、④縫い目表現の簡略化（個印→×印→沈線による区画→なし）、⑤表面文様の省略化、といった特徴を見出すことができる。なお、各段階と豊前地域の編年（長 2102）や実年代との関係性は、厳密には一致しない部分もあるが、およそ1段階＝Ⅲ－1期（6世紀中頃）、2段階＝Ⅲ－2期（6世紀後半）、3・4段階＝Ⅲ－3期（6世紀末～7世紀前葉）、5段階＝Ⅳ～Ⅴ－1期（7世紀前半～中頃）を想定している。

また、分布や消長を地域単位で確認すると、九州島では、福岡県の筑前地域で1～5段階まで継続して出土し、分布の中心となっている。定留鬼塚遺跡を含む豊前地域は、それに次ぐ出土が認められる。宮田氏も指摘（宮田 1999）するが、豊前地域南部では、初現の茶臼山東1号窯跡資料から文様が不定形なものや少ないものも多く、地域の特徴とすれば、皮袋形提瓶の生産と消費地の関係を探るうえで重要な知見といえる。

3. 中津市定留地区における須恵器生産と消費のあり方

中津市定留地区やその南側の諸田地区のある下毛原東側一帯は、古墳時代後期から多くの遺跡が展開し、場所を変えながら、古代（7世紀以降）の集落が認められる。小柳和宏氏は、その背景として、①定留遺跡などのたこ壺及び焼成土坑から海への依存度が高まったこと、②伊藤田窯跡群による須恵器生産、③伊藤田田中遺跡の鉄生産など、生産活動の分業化されたことを背景として指摘する（大分県教育庁埋蔵文化財センター編 2015 所収の「第4章 総括」）。そのうち、②伊藤田窯跡群は、古墳時代後期から奈良時代にかけて長期にわたって継続し、須恵器や瓦が生産された。6世紀後半（末）～7世紀の窯跡では、踊ヶ迫、瓦ヶ迫、夜鳴池、草場、城山、穂屋1・2号などの窯跡が知られている。当窯跡群では、口縁部に突帯をもつ大甕などの独自の特徴をもつ器種が生産され、下毛地域のみならず上毛地域まで分布し、桑原屯倉との関係も想定されている（長 2012）。定留鬼塚遺跡1号墳の甕口縁部（図1－23）も突帯がやや形骸化しているが、この特徴をもつ資料と考えられる。坏H大型品に関連する資料は、窯跡で

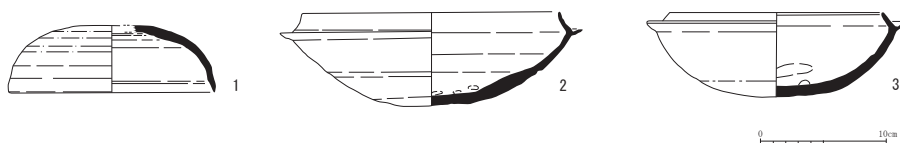


図4 定留鬼塚遺跡と周辺遺跡出土の坏H大型品（S=1/6）

（1 定留鬼塚遺跡1号墳、2 諸田南遺跡古池地区、3 犬丸川流域遺跡縫原地区）

は確認されていないが、近隣の諸田南遺跡古池地区の竪穴建物跡 SH4 と犬丸川流域遺跡縫原地区 SD2 で出土している。後者は、完形で溝に伏せられた状態で出土し、溝廃絶時の祭祀行為と想定され、坏H大型品を用いた祭祀行為から集落と墳墓の関係性を読み解くことができる。また、①は、諸田南遺跡二反地区など下毛原に展開する集落から蛸壺が出土し、①②の関連資料から定留鬼塚遺跡1号墳は、下毛原に展開する集落と蛸壺から海を介した関係に加えて、犬丸川と天貝川に挟まれた流域における須恵器生産と消費のあり方を窺うことができる。

次に、定留鬼塚遺跡1号墳皮袋形提瓶とそれ以外の資料の製作の過程と特徴を比較すると、皮袋形提瓶の大枠での特徴はとらえているものの、①胴部（体部）は坏Hを使用すること、③肩部の把手は4つと最大数で、半環状と鉤状の両方がついている、という他にはない特徴を示す。このことから、定留鬼塚遺跡1号墳皮袋形提瓶の製作工人は、規範とすべき皮袋形提瓶を見たことがない、または他の生産地と比較してより少ない情報で製作したと考えられる。これらのことは、須恵器の生産において、特殊な器形やそれまで製作したことがない器種も必要（依頼）があれば製作すること、原物がない場合は、伝聞情報等の限られた情報で作ることがある、という2つのことを示唆していると考えられる。

上記に加えて、定留鬼塚遺跡1号墳では、深鉢型の高坏（鉢）で、短い脚部からなる器台を親器とする子持器台（山田邦和氏の分類（山田 1998）で子持器台Ⅰ－3類）が出土している。同時期に、九州島の周防灘沿岸では天観寺第2区1号窯跡などの装飾付壺4点、瀬戸内海沿岸では国東市一ノ瀬1・2号墳で鳥舟形器台、子持器台Ⅰ－2類の3点が出土している。1で指摘した古墳が周防灘（瀬戸内海）に面した崖面に立地していることとの関係が想起される。

また、天観寺山窯跡では、装飾付壺などの特殊須恵器や土鍾・蛸壺が確認されている。長氏は豊前地域の須恵器生産を甕や高坏などの特徴的な器種から天観山窯跡系と伊藤田窯跡系の2

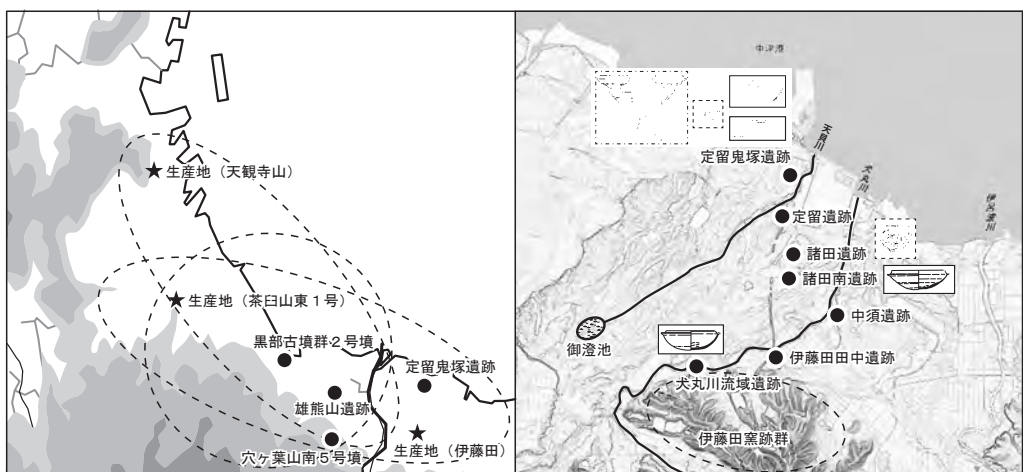


図5 豊前地域と中津市定留地区での須恵器生産と消費モデル

（左図：長 2012 を参照に作成、右図：国土地理院地図（傾斜量図）に遺跡名・図等を加筆）

つの流通圏を想定する（長 2012）。今回、豊前地域の皮袋形提瓶は、築上町茶臼山東窯跡で生産されていることや近隣の豊前市・上毛町の古墳で継続して消費されていることから、6 世紀後半（本稿 2 段階以降）に、豊前南部の山国川以北においても一つの小地域圏を想定したい。

今回は、定留鬼塚遺跡 1 号墳の皮袋形提瓶・坏 H 大型品・子持器台・突帯付口縁甕、蛸壺から周辺の集落との関係性を指摘した。須恵器の生産地は伊藤田窯跡群の瓦ヶ迫窯跡や夜鳴池窯跡などの時期が想定され、近接する伊藤田田中遺跡などを含んだ犬丸川流域における地域社会における各種生産・生業（集落）と墳墓の関係を読み解くことができる。

4. 結びに代えて

定留鬼塚遺跡 1 号墳出土資料から、九州島における皮袋形提瓶の分類と中津市犬丸川流域における須恵器生産と消費の事例を通じて地域社会のあり方について検討を行った。皮袋形提瓶は胴部形態や縫い目表現から 5 段階にわけられること、定留鬼塚遺跡の特殊な須恵器、土師器蛸壺からは、犬丸川流域で、中流域の丘陵裾部周辺で須恵器生産や製鉄生産、やや下った台地平坦面の集落で海と関わる生業が展開し、下流域の臨海部で墳墓を形成するという小地域を須恵器生産と消費のあり方から明らかにすることができた。さらに、豊前地域南部では、皮袋形提瓶の窯跡資料と古墳資料、文様の簡略化された資料が 2 段階以降継続することから、特殊須恵器を地域生産し消費する地域圏を想定した。一方で、皮袋形提瓶は西日本を中心に広く分布することや調査が不十分な資料もあることから、定留鬼塚遺跡 1 号墳資料が列島においてどのような特徴・特色として位置付けられるかを今後の課題として取り組んでいきたい。

謝 辞

本稿を作成するにあたり、下記の方・機関にお世話になりました。記して感謝します。

井 大樹、大分県立埋蔵文化財センター、大分県立歴史博物館、西 貴史、服部真和、古谷 毅、丸山利枝、吉田 寛

註

- (1) 発掘調査は、中津臨港道路建設に伴い、崖面より西側の平坦面を中心に行われた。石室基底部のみが残存する状況や周辺地形から、古墳の基数は、より多かったと考えられる。
- (2) 報告書（第 12 図 17）では、高坏脚部とする。本資料の透かし下の裾部が一旦折れ曲がった後、ハの字状に踏ん張る形態上の特徴や子持器台鉢（坏）部の出土を考慮して、子持器台の脚部とした。鉢部と同一個体であれば、子持器台の点数は 1 点になる。
- (3) 近年、九州では古墳時代終末期～奈良時代（6 世紀末～8 世紀前半）の須恵器を坏 H・G・B

の関係からⅠ～Ⅳ期に編年する試みがある（久住・長 2023）。その編年では、坏Hの15 cmの大型品を除くと、坏H0～坏H1（13～13.5 cm）と坏H2（10～11 cm）になり、Ⅰ期（≒長Ⅲ－3期）までに初葬が、Ⅱ期（≒長Ⅳ期）までに追葬が行われたと考えられる。

- (4) 木内石亭の『曲玉問答』（天明3年）掲載の「羽州鳥海山掘出」の図が確かであれば、東北地方にも出土例が認められる（田辺 1981）。
- (5) 本文では、小田編年ⅢB期古相～Ⅴ期相当とする。本稿で用いた編年とは厳密には一致しないが、2段階後半～3段階＝長Ⅲ－2期、4段階＝長Ⅲ－3期～Ⅳ期前半に該当する。なお、盛期とする2～3段階は、小田編年ⅢB期～Ⅳ期（6世紀第4四半期～7世紀第1四半期）をあてる。
- (6) 綾羅木遺跡の皮袋形土師器は4世紀の資料で本稿の対象から除外した。宮田氏が佐賀県出土地不詳、陳氏が不明資料（佐賀県立美術館所蔵）とした2点は、佐賀県内出土地不詳資料とした。
- (7) 小池寛氏は、古墳時代後期の提瓶では環状の把手が小型化しながら継続する一方で、角状把手は徐々に形骸化し、最終的に瘤状になると指摘する（小池 2010）。皮袋形提瓶には、Ⅰ－A類やⅠ－B類で半環状把手が、Ⅰ－D類に鉤状把手が、Ⅱ類に両者が見られることから現時点では、当初から把手がつくこと、省略傾向にあるが、最終段階まで把手が残ることが推測されるにとどまる。
- (8) 乃木松1号墳資料は文様簡略化などから5段階としたが、大型品であることや周溝から本稿1段階頃の坏Hや腿が出土していることから、より古くなる可能性もある。

引用・参考文献

【表1 参考文献・図3 挿図出典（冒頭番号が文献番号に対応、図版は参考文献を引用・一部再トレース）】

- 1 大分県教育庁埋蔵文化財センター（編） 2015『定留鬼塚遺跡』、大分
- 2 南 善吉（報告） 1898「雑報 豊前國の齋甕及び劔頭（圖入）」『考古學會雜誌』第2篇第7號、東京：pp. 274-275
- 3 大分県教育委員会（編） 1995『小迫墳墓群』、大分
- 4 九州歴史資料館（編） 2014『土佐井遺跡2区・土佐井小迫遺跡・唐原山城跡・穴ヶ葉山南古墳群2次・新池南古墳』福岡県教育委員会、福岡
- 5 築城町教育委員会（編） 1998『船迫窯跡群（茶臼山東窯跡群・堂がへり遺跡・堂がへり窯跡群・宇土窯跡）』、福岡
- 6 福岡県教育委員会（編） 1979『黒部古墳群』玄洋開発株式会社、福岡
- 7 陳 永強 2024「日本列島における皮袋形瓶の分布と様相」『名古屋大学人文学フォーラム』7、愛知：pp. 17-32
- 8 三輪町教育委員会（編） 1977『乃木松古墳群』、福岡
- 9 津屋崎町教育委員会（編） 1981『奴山古墳群』、福岡
- 10 宇美町教育委員会（編） 1981『宇美観音浦』、福岡
- 11 愛知県陶磁資料館（編） 1995『一古代の造形美—装飾須恵器展』、愛知
- 12 福岡市教育委員会（編） 1985『福岡市博多区席田遺跡群（Ⅴ）丸尾古墳』、福岡
- 13 前原市立伊都歴史資料館（編） 1997『再見！ 糸高の博物館 part 1 古墳時代編』、福岡

- 14 那珂川町教育委員会（編） 1982『観音山古墳群』、福岡
- 15 那珂川町教育委員会（編） 1988『観音山古墳群Ⅲ』、福岡
- 16 春日市教育委員会（編） 2019『塚原古墳群—2次調査—』、福岡
- 17 大野城市教育委員会（編） 1995『牛頸塚原遺跡群』、福岡
- 18 前原市教育委員会（編） 1995『荻浦—古墳編—』、福岡
- 19 甘木市史編纂委員会（編） 1984『甘木市史資料』考古編 甘木市、福岡
- 20 穂波町教育委員会（編） 1994『穂波地区遺跡群』、福岡
- 21 佐賀県教育庁文化財課（編） 1991『都谷遺跡』、佐賀
- 22 佐賀県教育委員会（編） 1979『二塚山』、佐賀
- 23 小田富士雄 1979「九州の須恵器」『世界陶磁全集』2 日本古代 小学館、東京：pp.272-233
- 24 佐賀県立博物館（編） 1998『日本の古墳 僕が調べた歴史の謎』平成9年度佐賀県立博物館企画展図録、佐賀
- 25 熊本県教育委員会（編） 1975『塚原』、熊本
- 26 熊本県立装飾古墳館（編） 1994『器は語る 須恵器の美と技と』第4回企画展図録、熊本

【参考文献（上記以外）】

- 岸本雅敏 1975「装飾付須恵器と首長墓」『考古学研究』第22巻第1号 考古学研究会、岡山：pp.34-59
- 久住猛雄・長 直信代表執筆 2023「九州島における飛鳥時代の土器 土器検討部会のまとめと遺跡動態分析にあたっての留意点」『集落と古墳の動態Ⅳ 飛鳥時代（第1分冊）』第24回九州前方後円墳研究会 大分大会、九州前方後円墳研究会、大分：pp.1-25
- 小池 寛 2010「須恵器提瓶再考」『京都府埋蔵文化財論集』第6集 京都府埋蔵文化財調査研究センター、京都：pp.175-182
- 柴垣勇夫 1984「装飾付須恵器の器種と分布」『愛知県陶磁資料館研究紀要』3 愛知県陶磁資料館、愛知：pp.2-17
- 田辺昭三 1981『須恵器大成』角川書店、東京
- 長 直信 2012「豊前地域の土器様相と須恵器生産—7世紀を中心に—」『古文化談叢』第67集 古文化研究会、福岡：pp.55-107
- 中村 浩 1993『古墳時代須恵器の編年的研究』柏書房、東京
- 宮田浩之 1999「皮袋形土器集成（本文タイトルは皮袋形須恵器資料集成）」『福岡考古』第18集 福岡考古懇話会、福岡：pp.51-55
- 山田邦和 1998『須恵器生産の研究』学生社、東京

挿図出典（引用、一部再トレース）

- 図1・図4・図5 大分県教育庁埋蔵文化財センター（編） 2015『定留鬼塚遺跡』、大分
- 図4・図5 中津市教育委員会（編） 2008『犬丸川流域遺跡 縫原地区・平田地区・長善寺地区』、大分
- 中津市教育委員会（編） 2016『諸田遺跡・諸田南遺跡発掘調査報告書（遺物編）』、大分